

Exploring the Landscape and Prospects of Schenkerian Studies in Japan: Research Themes Analysis and Case Studies

彭, 子濃

<https://hdl.handle.net/2324/7363799>

出版情報 : Kyushu University, 2024, 博士 (芸術工学) , 課程博士
バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



氏 名	彭 子 澧			
論 文 名	Exploring the Landscape and Prospects of Schenkerian Studies in Japan: Research Themes Analysis and Case Studies (日本におけるシェンカー研究の様相と展望——研究テーマの分析と事例研究)			
論文調査委員	主 査	九州大学	准教授	西田 紘子
	副 査	九州大学	准教授	長津 結一郎
	副 査	九州大学	名誉教授	矢向 正人

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、日本におけるシェンカー研究の様相と展望を、研究テーマの分析と事例研究という 2 つの観点・方法から明らかにしたものである。音楽理論という学問分野が一定の独立性をもって営まれてきた北米では、20 世紀後半からシェンカー理論・分析 (Schenkerian theory and analysis) の研究が興隆した。しかし、日本はそれとは異なる状況にあるという点は、これまで漠然と認識されてきたものの、その実態は詳らかにされてはいない。そこで着手された本研究は、ある学問領域が特定の地域でどのように発展してきたかの事例研究として位置づけられ、音楽理論の特定領域に照準して日本における研究史を考察した新規の試みであるといえる。シェンカー理論やシェンカー分析といった語ではなく、シェンカー研究という語をタイトルに用いた点については、当該分野においては日本独自の展開があることを加味したためと考えられる。とくに 2010 年代以降、音楽理論の分野では「グローバルな音楽理論史」の必要性が唱えられており、本研究はこの潮流に沿って、日本における理論史の一部を提供している。

本論文は 2 部構成となっており、前半の第 1 章から第 3 章は、日本におけるシェンカー研究の歴史化が試みられている。ハインリヒ・シェンカーという人物やその理論・分析について、複数のデータベースを用いてこれまでどのような媒体でどのような研究が行われてきたかが網羅的に調査され、システムティック・レビューの方法を応用して研究テーマに関する分類や年代変遷の分析がなされている。

具体的には、第 1 章では、これらのデータに基づいてシェンカーに言及した戦前の例から今日の事例までが概観的に歴史化されている。この章を導入として、続く第 2 章では、なかでも 1980 年代以降の学術出版物 45 件に照準し、欧米の先行研究で用いられてきた分類指標に基づいてテーマ別の分類が行われている。そのうえで第 3 章では、これらの結果を踏まえ、日本でとくに発展してきた研究テーマ領域が考察されたほか、一方で日本ではまだ展開していない研究領域や未開拓のトピックが主に欧米における研究との比較から導き出されている。

後半の第 4 章から第 6 章の事例研究では、第 3 章で論じられた未開拓領域への着手を意図して、音楽知覚・認知の領域や教育との接合が試行され、今後の日本におけるシェンカー研究、音楽理論研究の道筋をより具体化することが企図されている。

具体的には、第 4 章では、シェンカー理論の専門的訓練を受けていない聴き手が楽曲の階層構造をどのように意識的・無意識的に知覚・認知しうるかという問題を、楽曲分析の実践を伴うアンケ

ート調査やインタビュー調査を通して検討している。第5章では、第4章の調査結果をもとに、階層構造の知覚・認知にはどのような音楽的要素が影響しうるのかが、同じく質問紙による調査から分析・考察されている。これらの調査の背景には、シェンカー理論をより聴取の実態と結びつけて実践しようという教育的な動機があったと考えられる。最後の第6章では、分析実践の教育的ポテンシャルに目を向け、音楽理論を専門としない学生にアプローチする方法を、先行研究を参考にしつつ、質的調査を通して理解の度合い等の点から検討している。調査参加者にやや偏りがあるほか、コロナ禍であったためオンラインでの調査となり、若干の不便があったと考えられるため、これらの調査結果から一般化は難しいと考えられるものの、萌芽的な方向性は示されているといえる。

結論では以上の文献調査に基づく歴史化と事例研究から、日本における当該研究の未来が展望されている。また、アジアなど他地域の研究文化との比較や、事例研究の精緻化も、今後の課題として挙げられる。

論文審査では、矢向正人教授から、シェンカー理論の構造が音楽家や学習者にとって未知であるかどうかをどのように知りうるのか、カデンツの階層構造とシェンカー理論の階層構造との違い、調査において材料とした楽曲を和声構造を有するピアノ曲とした場合とそれを有しない無伴奏作品とした場合の性質の相違、表層の詳細を深層構造に照らして理解する GTTM の教育的効果も検討すべきではないか、シェンカー理論を通した音楽の理解とは何か、調査における音源の聴かせ方や聴取の回数、同時代的に受容されていたドイツとそうではない日本における演奏の正当性のとらえ方などの質問やコメントが寄せられた。長津結一郎准教授からは、本研究の新規性、グローバルな音楽理論史における日本の独自性、西洋や非西洋圏のシェンカー研究と比較した時に予測される特徴、後半の事例研究が日本のシェンカー研究の発展にどのように資するのか、第3章と第4-6章の関係、未発展のテーマのうち事例研究のテーマをどのように選出したのか、未発展のテーマをとり上げる可能性などの質問やコメントが寄せられた。審査員からのこれらの指摘に対して、現時点までの調査結果や執筆者の専門性から、そして未調査の点や今後の課題を含め、おおむね適切に応答がなされた。

以上の審査を通して、本論文は博士（芸術工学）の学位に値するものと判定された。